

初唐の道士孫思邈について

山 崎 宏

一

初唐の道教界では、茅山派の王遠知らが唐朝の権力と早くより結んで羽翼を張り、世に顕われたのに較べて孫思邈は隱逸の志固く、権勢に近付くことを避け、専ら教学特に医学の研究に努めた名道士として知られている。かれの伝記は正史では「旧唐書」卷一九一の方伎伝と「新唐書」卷一九六の隱逸伝とに載っているが、これはかれが医方の技を究め、また隱逸の志を貫いたことを示すものである。この両書の中では「旧唐書」の方が勿論早く、その内容も豊富で、「新唐書」の記事は一見してその省録と考えられる。

このほか孫思邈の伝は五代南唐の沈汾の「統仙伝」⁽¹⁾、元の張天雨の「玄品録」卷四⁽²⁾、元の趙道一の「歷世真仙体道通鑑」卷二九⁽³⁾などいわゆる神仙伝の類におさめられているものが多い。なお宋初の太平興国二年（九七七）李昉の撰とされている「太平広記」卷二一・神仙類二二に「仙伝拾遺」と「宣室志」とを引き孫思邈と題して二八一一字にわたる長文を掲げてある。「仙伝拾遺」は有名な道士杜光庭の著書で、杜光庭は唐末より五代前蜀の人、「道教靈驗記」

もその著作として知られている。「宣室志」は唐末の張誦の撰とされ、記事には開成年間にわたるものがある⁽⁴⁾ので、これらは「旧唐書」撰出以前の著書として注目すべきものと思われる。「太平広記」にはこのほか卷二一八・医類一に「譚賓録」を引用し、また卷二二二・相類二にも「定命録」を引き、共に孫思邈と題して一文を載せてある。この中、卷二一八の記事は一〇一八字で、内容は「旧唐書」の本伝と大差はなく、卷二二二の文は僅か六七字で、記事は「旧唐書」の本伝に含まれている。

このほか仏教史関係書では、法蔵の「華嚴経伝記」卷五に処士孫思邈の小伝が載せてある。これは孫思邈と同時代の著者の記録として注目すべきである。なお稗史・小説の類を歴史学に利用するには充分の用意を要するが⁽⁵⁾、孫思邈に関する記事としては、宋の洪邁の「容齋五筆」卷二に「孫馬両公所言」があり、明の楊慎の「丹鉛総録」卷一八に「孫思邈詩」があり、清の王士禎の「池北偶談」卷一四に「孫真人」等がある⁽⁶⁾。いま一々これらを引用する暇はないが、かれが如何に後世まで有名であったかを示すものである。

二

孫思邈が京兆華原（陝西省耀県）の人であることは、諸資料ともほぼ一致しておるが、ただ「華嚴経伝記」卷五には雍州永安（陝西省三原県北五十里の城）の人とある。しかしこれは前者とほぼ同一地域を指すものと思われる上に、今とくに問題とする必要はないので、前者即ち「旧唐書」本伝の説を一応認めておくに止める。これに反してかれの生卒年月については、異説があり、その究明は困難である。

「旧唐書」の本伝によれば、かれは上元元年（六七四）病氣のため、唐の高宗に帰郷を請うたが許されず、特に良馬と長安の光徳坊の鄱陽公主司宅とを賜わったのでそこに住んだ。当時かれの弟子の盧照鄰もそこに病臥し、賦を作

ってその序文の中に師の孫思邈のことを書いたというが、それに「思邈自云開皇辛酉歲生、至今年九十三矣。」という一句がある。この記事によると道士孫思邈は、開皇辛酉歲（開皇二十一年・六〇一年）の生れで、いま年九十三歳であるといったというので、そのいまは六九三年（則天武后長壽二年）と推定される。「旧唐書」はこの後にかれが永淳元年（六八二）に卒したと明記しており、「新唐書」またこれを承けて永淳初年百余歳で卒したと述べている。これでは開皇辛酉生れは疑問になり、「今年九十三矣」の今は、盧照鄰の序文にかれが光徳坊の官舎（鄱陽公主邑司宅）に入ったという癸酉之歳（六七三）ではないかと考えられる。これで逆算すれば生年は五八一年（九十三歳を数え年として試算した）となる。五八一年は辛丑である。これから開皇辛酉は恐らく開皇辛丑の誤写ではなかったかと考えられる。そうすれば即ち五八一年に生まれて永淳元年（六八二）に卒すれば百余歳でこの世を去ったことになろう。

これに対して「統仙伝」は永徽三年（六五二）二月十五日に孫思邈が卒したといい、「歴世真仙体道通鑑」もこれによって更に「寿百有余歳」と加筆しているが、開皇辛酉（六〇一）生れでは永徽三年に五〇余歳にしかねない。そこで私は開皇辛酉は開皇辛丑（五八一）の誤写で、盧照鄰の序文にみえる癸酉の歳（六七三）に九三歳、永淳元年（六八二）に百余歳となったものとみたい。この盧照鄰の癸酉の歳に九三歳であったという序文は、孫思邈が生存中にその弟子の盧照鄰が記録したもので信憑するに足りる。そこで生年は当然五八一となり、それが辛丑の歳であることを辛酉と誤伝したものと見なければならぬ。⁽⁷⁾

孫思邈の卒年を永淳元年とする説に関連して、法蔵の「華嚴経伝記」卷五を見ると「永淳前卒」とあるのが注目される。これに永淳前というのは、永淳元年（六八二）以前を指すものであれば、この前年の開耀元年（六八一）と違って然るべきものの様に考えられる。それを避けて永淳前という表現を用いたのは、孫思邈の死が実際六八一年でなく、その翌年の六八二年ではあるが、永淳と改元した二月癸未の前日、すなわち開耀二年の二月壬午以前を指したのでは

ないかと推測される。例えば大正十四年十二月に昭和と改元されたが、この年の十月頃のことはいう場合が多い。それが昭和元年十月というよりも実感に則しておる。孫思邈の死は「華嚴經伝記」の著者法蔵が四十歳頃のこと、而も当時は毎年改元があったので、同時代に生きていた著者としては、こうした表現を用いる方が自然のように思われ、むしろ真実を伝えたのではないかとみられる。

この点、清朝の考証史学者王鳴盛はその「十七史商榷」卷九二・孫思邈年の中で、「旧唐書」が孫思邈の年令を記さなかったのは確信がなかったからで「新唐書」が百余歳と附説したのは贅説であるといっている。すなわち

「旧於伝末云、永淳元年卒、更不言年若干、蓋的年実無可攷。而以上文歴叙者、参詳之、則自是百余歳人、不言可知矣。新則改云、永淳初卒。而又添一句云、年百余歳。永淳之号本只二年、初興元年、有何分別。何必改作。而所添之句、則反成贅疣。」

と「旧唐書」の態度を支持しているが、「旧唐書」でも孫思邈が北周宣帝の時に太白山に隠居したとか、隋の文帝輔政の頃に国子博士として徴されたが起たなかったとか、北周や北斉の事を話すと眼に見える様であったとか、かれの郷里ではみな数百歳の人だといっている等と述べているのは、その不老長寿を誇張しようとしたものであるといっている。⁽⁸⁾そして王鳴盛は

「思邈蓋不欲以長生不死、驚駭世人、故自隱其年、而詭詞云開皇辛酉生。」

といい、孫思邈は不老長生で世人を驚かすことを避け、自からその年を隠したのであるが、開皇辛酉より唐初の癸酉まで七三年であるから、七三歳といったのを九三歳と誤写したのかも知れぬと論じている。しかし王鳴盛はこれにしても詭詞であるから、実年の考証を放棄した「旧唐書」の態度を支持しているとみられるが、前述のように辛酉を辛丑の誤写とみれば、孫思邈は隋の開皇元年辛丑の年（五八一）生れで、唐の永淳元年（六八二年）の初め一〇二歳で

卒した人であると一応決定されるであろう。

三

前項で孫思邈の生卒年代を五八一～六八二と推定したので、これによって一応かれの伝記を述べてみたい。「旧唐書」の伝によれば前述のようにかれは京兆華原（陝西耀県）の人で、七歳にして就学、日に千余言を誦し、弱冠にしてよく莊老および百家の言を学び、兼ねて積典を好んだという。このことは他の資料にも共通して多くみられるので、事実であろうが、北周時代に独孤信が孫思邈をみて聖童であると嘆じたことや、北周の宣帝の時に孫思邈が太白山に隠居したことや、後の隋の文帝楊堅が北周末に輔政していた時、国子博士に徴したが起たなかったこと等、かれの出生以前のことであるから、既述の通り実際にはあり得ないことになろう。

但し孫思邈が太白山（陝西郿県東南四〇支里）に入って修養したことは認められ、かれは一般に太白山の道士として知られている。この点、「統仙伝」や「歴世真仙体道通鑑」など仙伝系統の伝記に、正史系統の書に見られない話がつぎの様に叙べられてある。すなわち「統仙伝」によれば

「隠太白山、学道鍊氣養形、求度世之術。洞晓天文推歩、精究医薬、審察声色、迥蘊仁慈。凡所举动、務行陰徳。用心自固、济物為功。」

とあるように、かれは太白山にあって、学道・鍊氣・養形・天文・推歩（曆法の一種）・医薬などについて修業したことは明らかである。そしてかれが度世济物の志をもち、仁慈を蘊み陰徳を施すことに努めたという例証として、可成り長いつぎの様な物語を前掲の文に続いて載せている。

即ち孫思邈がある日、路を歩いていた時、偶々人が小蛇を殺そうとしているのをみて、自分の衣類を脱いで小蛇を

賻い、薬をつけ治療をして放してやったことがあった。この後、一月程たってまた外出した処、立派な白衣の一少年に会った。少年は馬より下りてかれを迎拜し、私は貴方に救われたものであるが、父母が貴方にお会い致したいと望んでいると述べた。孫思邈は人に治療を施したことは極めて多くあったので、少年の話も聞いても格別意にも留めなかったが、余りに少年が懇請するので、請われるままに馬に乗ると飛行するようにして一城に到着した。伝記ではここで城中の立派さや王侯婦人などの美しい服装等を叙べた後、その王が自分の王子（白衣少年・小蛇）を救済加療して呉れたことを感謝して多くの賓客と共に盛宴を張ったという。やがて孫思邈が帰ろうとすると、王は財宝を贈ろうとしたが、孫はこれを受けず断った。そこで王は何を以って報いようかといひ、ついにその子に命じて竜宮で頒けてもらった薬方三十首を孫思邈に与え、貴方は真の道者であると称し、どうか濟世救民に努める様にといい、馬に乗せて太白山に送り帰したという。太白山に帰ってから孫思邈はこれを不思議に思い、竜宮の処方をつぎつぎに試みた処が、みな神効があったので、後に「千金方」三〇巻を著わした時、その中にこの竜宮方を散入したといわれている。

この話とは話の筋は違うが、孫思邈が竜宮の仙方を得た話が「宋高僧伝」卷一四の道宣の伝や「太平広記」卷二・孫思邈などにもみられる。道宣（五九六～六六七）は中国で南山律宗を開いた名僧で「唐高僧伝」等の名著が多く、謹厳な律僧であると同時に、深い信念をもつ感通の名僧であり、また「以定観根、随病与薬」といわれたように教化に巧みであると共に医療の心得もあつた高德の僧であつた。道宣は若い頃に終南山にあり、孫思邈もまたかつて終南山にかくれて道宣と会い「結林下之交、每一往来、議論終夕」といわれる程の親しく交際をしていた。長安附近ではその頃、旱天が続いたので、西域の胡僧が昆明池で壇をつくって雨を祈っていた。詔もあつて香灯なども備えられたが、凡そ七日すると却つて池が減水すること数尺になつた。⁽¹⁰⁾そこで或る夜老人が道宣を訪ねていうには「自分は昆明池の竜であるが、この頃旱天で雨が少いのは天意であつて自分に由るものではない。しかるに西域の胡僧が天子を欺

いて雨を祈るといい乍ら（自分即ち竜の脳をとって薬として利を得るために）池水を枯れさせている。そこで自分の命は旦夕に迫っている。どうか和尚の法力で加護して下さい」と願った。これに対して道宣は「私は汝を救うことが出来ないので、孫先生の処に急いで行ってみよ」と指示してやった。そこで竜（老人）は道宣律師の紹介だといって孫思邈に再三にわたって懇願したので、孫思邈も止むなく「私は昆明池の竜宮に仙方三十首があることを知っている。それをもって来て私に示せば汝を救うであろう」といった。竜は「その仙方は容易に人に伝えられるものではないのであるが、今は事急であるから仕方がない」といって捧げて来た。そこで孫思邈はそれを受け取って竜に対して「汝は胡僧などを懼れず、早く池に還れ。」と訓したが、池は数日にして水が大いに漲り、岸に溢れるようになったので、胡僧はついに術尽きて何も為すことが出来なかったという。

「統仙伝」の話は浦島太郎伝説に似ている処があり、竜宮の王が孫思邈に仙方を贈呈したことになるのに反し、「宋高僧伝」の方は孫思邈が昆明池の竜宮の仙方を要求して採取したことになるが、共に孫思邈が医薬の新しいものを熱心に求め、研究していたことを物語るものとみられる。しかもそれが竜宮という異国の新薬であったところに六朝を通じて伝来したインドないし仏教医学が、隋・書に至って頓にその質量共に増して来た事実を反映するものようである。それは律僧道宣がこの話に介在している点で注目されようが、「太平広記」卷二一ではこれは開元中に終南山で孫思邈が宣律師と交際しているのをみたという話に出ているので、時代的に誤りで多分に孫思邈の神性を強調する風がみられる。なおそこでは、この話を述べた後に

「又嘗有神仙降、謂思邈曰、爾所著千金方、濟人之功亦已矣。而以物命為藥、害物亦多。必為尸解之仙、不得白日輕拳。」云々

とあるように、神仙から孫思邈が著書の「千金方」を認められたこと、しかし動物を殺して薬を作れば尸解仙に止ま

り、白日昇天する天仙にはなれないことなどを聞かされて、

「其後思邈取草木之藥、以代虫水蛭之命、作千金方翼三十篇。每篇有竜宮仙方一首。行之於世。」とある通り動物に代えて植物の薬を研究し、「千金方」の後にまた「千金方翼」三〇篇を作り、これに毎篇一首づつ竜官方を入れたというので、孫思邈は仁慈の心の深い人で、常に内外の医薬の研究に努めた学者であったことが強調されている。

四

前述のように孫思邈は「旧唐書」では方伎伝に入れられているが、「太平広記」では神仙類に入れると共に、また医類一と相類二とに分けて都合三所にかれの記事をのせているのに注目される。すなわち「太平広記」はかれを全体として神仙となった道士として認めると共に、特にかれの方伎を医類と相類とに分けて考察したものとみられる。いまこの「太平広記」巻二一八をみると、医類第一篇に中国医学の古典とされている「傷寒論」の著者後漢の張仲景や、古来中国の名医と称えられている後漢末・魏初の華佗と並んで孫思邈が挙げられ、そこに弟子の盧照鄰がかれに名医が病をなおす道は何であるかを問うたのに対して、かれは医学の原理ないし哲学思想のようなものを述べている。それによれば、人は天に本ずいていゝもので、天に四時五行があるように、人には四肢五臓がある。その転運により天に雨・風・露霧・霜雪・虹霓等が現われ、人では覺・寐・呼吸吐納・精氣往来・榮衛（榮は血・衛は氣）・氣色・音声などが現われ、その常数は天も人も同じであるが、その調子を失うと人に熱や寒氣や瘤や疽などが見られ、天地に寒・暑や立石や山崩れなどが見られる。そこで良医はこれを導くに薬石を以ってし、これを救うに針灸を以ってする様に、聖人は天地を和するに至徳を以ってし、それを補うに人事を以ってする。故に人体に消しうる疾があり、天に

消しうる災があると論じている。⁽¹²⁾このほか人事については大胆・小心で、智は円満、行は方正であるべしと説き、さらに養性の道の要は自ら慎むということが大切で、それには憂畏を以って本となし、道を畏れ、天を畏れ、物を畏れ、人を畏れ、身を畏れるべきで、小を慎しむ者は大を懼れず、近くを戒しめる者は遠きを懼れないといい、能くこれを知れば水行しても蛟竜も害する能わず、陸行しても虎兇も傾ける能わず、五兵も及ぶ能わず、疫癘も染する能わず、讒賊も誘する能わず、毒螫も害を加えること能わぬであろうと説き、これを知れば則ち人事は畢ると述べている。

以上を要略するに、孫思邈の医学思想は天人相関の原理によっているものであって、人は天地自然と深く関連するもので、いわゆるその常数が乱れ、均衡が破れ、調子が失われるところに病が起るものであるから、良医は薬石と針灸とによってそれを消しうるものとみている。そのためには人事にも充分注意すべきで、特に養性のためには人は自らを慎み、何事に対しても恐れ憂うることが大切であると説いている。いうまでもなくこうした考え方は、中国伝統の医学思想に外ならぬものとみられるが、その詳細については具体的にその医学を検討してから再考すべきものであろう。そこで先ずここでは、「新唐書」の藝文志三・丙によって一応かれの著書をつぎに示しておこう。「*印は「旧唐書」の孫思邈の伝にも載せてあるものである。なお参考のため、下段に「鄭氏通志」巻六七により、「新唐書」に見られぬもののみを載せた。」

老子注*

莊子注*

千金方三〇卷*

千金翼方三〇卷

千金髓方二〇卷

福祿論三卷*

幽伝福寿論一卷

千金養生論

撰生真録一卷*

養性延命集二卷

養生要録一卷

養性雜録一卷

枕中素書一卷*

孫思邈枕中記一卷

神枕方一卷

神仙修養法一卷

会三教論一卷*

退居志一卷

医家要妙五卷

龜經一卷

五兆算經一卷

龜上五兆動揺経訣一卷

丹経訣要一卷

気訣一卷

真気銘

焼煉秘訣一卷

竜虎通元訣一卷

竜虎篇一卷

竜虎乱日篇一卷

唐太清真人煉雲母訣二卷

黄帝神竈経三卷

仙人馬君陰君内伝一卷

内外神仙中経秘密図一卷

以上のほか「続仙伝」には脉経一卷の書名が見え、「宋史」の芸文志四に九幽福寿論一卷（上掲幽伝福寿論と同じものか）・孫思邈齊人月令三卷があり、同芸文志五に孫思邈坐照論并五行法一卷があり、さらに同芸文志六に孫思邈五臟旁通明鑑図一卷・王函方三卷・孫思邈芝草図三〇卷などがみられる。また馬端臨の「文献通考」卷二二二・経籍考・医家には「千金方」についての解説などがあり、また同卷二二三によれば孫氏伝家秘宝方三卷という本は、孫思邈の後と称する宋の尚藥奉御太医令孫用和の編集した本で、孫用和の二子孫兆・孫宰は熙寧・元豊の頃すなわち北宋神宗の頃には医を以って有名で、その右に出る者はないともいわれたという。

もともと個人の著書などは、時代が降るに従って発見されたりすることもあって、次第に前代の調査に附加され、その数を増してくるもので、中には後人が著名人に仮託した場合もあるので、今直ちに上記の諸書が悉く孫思邈のもののみであるとは断定し難いが、いうまでもなくかれの主著は「千金方」三〇卷（華嚴経伝記では凡六十卷とあるが、誤であろう）で、「道藏」にも納められており、日本でも天明乙巳年（五年、一七八五）に和刻されている。その序文の刻千金方序⁽¹³⁾によれば、「千金方」の版本は宋の英宗の治平年間（一〇六四〜八）に錢象先らが勅を奉じて刊行したのを始めとするという。そして中国では万曆版はあるが、猥脱が多く、康熙版はこれによるのでよく読めない。わが国では万治年中（一六五八〜六〇）に万曆版を翻刻したが、板が腐爛してしまったので、宋版を求めたがなく、元朝に宋版を重刻したものによって今和刻したとある。なおこの版本には、前述の治平三年正月二十五日の日附で刊行した際の林億・錢象先等の「校定備急千金要方後序」なるものが附けてあり、孫真人は「其学精而博、其道深而通。以今知古、由後視今。信其百世可行之法也。」と述べ、さらに孫思邈の人となりや行事については、上述の盧照鄰の「道洽古今、学殫術数」云々の言を引いて称讚している。

中華民國五十一年芸文印書館影印の道藏に収めてある「孫真人備急千金要方」は、上述の林億等の校正本であるが、

今これら諸版本の異同やその内容などについては触れる暇がないので、その他の孫思邈の著作と共に後日の研究に俟つこととする。

五

すでに触れたように孫思邈は、医術の上に卓れた高德の道士であると共に、相術や予言についても超人的な能力をもっていた人とされ、「太平御覽」卷三二二では相類にかれを入れて述べている。すなわち孫思邈は年百余歳で医術をよくした人で、或るとき高仲舒に「君には貴相がある。君が齊州刺史となった時、わが児が君に仕えるだろう。その折にわが児が杖罪を得るような事があるだろうが、その時はどうかこの老人の言を憶い出して、釈放して頂きたい。」といったところが、その後、果してこの言葉通りになったという譚を「定命録」を引用して載せてある。この物語の高仲舒は隋の名臣左僕射高頴の孫の高叡の子で、開元年中に侍中宗璟の信任厚く、常に政治の故事を諮問されていたが、⁽¹⁴⁾ 兩唐書の高仲舒の伝にはこの話を欠いている。また高仲舒が齊州刺史になったという事も見られないので若干疑問はあるが、これに似た話を兩唐書とも孫思邈の伝にのせている。それは「旧唐書」によると凡そつぎの通りである。

太子詹事の盧齊卿が童幼の頃、人倫について孫思邈に問うた時に、答えて「汝は今後五十年をへると方伯（地方長官）になるであろう。そしてその時にわが孫が汝の属吏になるであろう。」といったが、後に盧齊卿は徐州の刺史となり、孫思邈の孫の孫溥が果して徐州内の蕭県の丞になった。孫思邈が盧齊卿に初め答えた時には孫溥はまだ生まれていなかったのに、この将来のことを預知したのである。凡そ諸々の異迹は多くはこの類であるといっている。なおこの記事の前に「旧唐書」の伝では、孫思邈が郷里では数百歳の人ともいわれ、北周や北齊の間のことを話すと歴々眼に見える様であり、視聴は衰えず、魏徵らが詔を受けて齊・梁・陳・周・隋五代の歴史を編集した時も、遺漏あるを

恐れて孫思邈を訪ねると、目にみえる様に伝授したという。そしてこの記事の後に東台侍郎の孫処約がその子五人（倓、傲、俊、佑、侗）をつれて孫思邈を訪れて人事を問うた時に、「俊は先きに貴となり、佑はおそくなって達し、侗は最も重くなるが、兵を執ることに禍がある。」などと孫思邈が予言したところが、みなこの言葉通りになったという話がのべられている。

以上の高仲舒・盧齊卿・孫処約についての物語は「太平広記」のいう相類の部に属するもので、人相を見てその将来を予言したものである。高仲舒と盧齊卿との話は類似しているが、二人は別人で共に「唐書」に立伝されている。盧齊卿は北齊滅後北齊から隋に仕えた名文家盧思道の孫に当り、寛厚の士で則天武后時代によく人物を推薦して政界に知友が多かった。孫処約については「旧唐書」・「新唐書」共その伝を立ててあるが、汝州の人、唐の高宗の時に中書令杜正倫が中書舎人の人員を増そうとした時、高宗は孫処約一人でわが事を弁ずるに足りるといって増員しなかつたといひ、とくに孫思邈が予言した侗については、睿宗の時に左羽林大將軍として契丹を征伐し、ついに戦死したとある。何れにしても孫思邈の相術は卓れていたものらしく、それを証する実例は恐らくこれら三例に止まるものではなかつたので、「旧唐書」の伝では前述のようにその異迹は多くこの類であるといつて一々の例挙を省いているのである。しかも孫思邈がこのような将来についての予言と共に、過去の史実の正確な記憶においても、全く超人的な能力をもっていたことに就いては既に触れたが、こうしたことから、かれが隋以前に生まれて数百歳であるなどと評判を立てられたものと思われる。そしてかれが特に孫真人とよばれ尊信されたのも、一つはこの神秘的超能力によつたものの様に推測される。

孫思邈は隱逸の高士であって、仕官のことは絶対に拒否した。かれの生卒年代を考証した処に述べた通り、隋の文帝がかれを徴して国子博士となさんとしたが、かれは起たなかったというのは年齢的に早やすぎて事実とは考えられない。しかも嘗つて親しい人に、これから五十年を過ぎると聖人が出て来るから、その時に自分はそれを助けて世人を濟うであらうといったという。これは唐の太宗を指したのであるが、太宗は即位してかれを都に召し、爵位を授けようとしたが受けなかった。ついで高宗が顯慶四年（六五九）召して諫議大夫に任じたが、また固辞して受けず、さらにかれの晩年になって高宗が承務郎を授け、尚藥局に勤務するように命じたが、これまた固く辞してその職にも就かなかったのである。

ただかれは上元元年（六七四）病と称して故郷に帰ろうと願った時、特に良馬と鄱陽公主の邑司の宅（公主が早死して空家になっていた）を賜わったので、ここに住んだことがあった。こういう点からみると、かれは官途には就かなかつたことは疑ないが、宮廷との関係はなかつた訳ではなく、何等かの天子の恩寵があつたに相違ない。それに既述のように当時知名の士であつた宋令文・孟詵・盧照鄰らが「師資之礼」をとつていたことが、かれの伝にも明記されている。この点、前項で述べた高仲舒・盧齊卿ないしは孫処約にしても、北朝以来の名族の家の出身であつて、恐らく相互に交遊していたものと思われる。

宋令文は有名な初唐の詩人宋之問の父で、汾州の人、高宗の時に東台詳正学士となつたが、なお儀鳳四年（六七九）に吐蕃の贊普の死があつたので、かれは高宗の命によって吐蕃にゆき会葬して来たことが「旧唐書」卷一九六上・吐蕃伝にみられる。恐らくかれは学識・礼節ある強勇の紳士で、外交使臣に選ばれたのではないかと思われる。⁽¹⁷⁾

孟詵の伝は「旧唐書」卷一九一にやや詳しく述べられている。⁽¹⁸⁾ かれは汝州梁の人というが、「太平御覽」卷一九七の伝記では平昌人とあり、有名な唐の懷感（浄土宗善導の弟子）の「釈浄土群疑論」七卷の序文の作者で「平昌孟銑」といわれている。このことについて金子寛哉氏は初め孟詵と孟銑とは別人かと疑い、後に考証して河南の梁より山東の平昌に移籍したものと考え、孟詵・孟銑同一人説を推定しておられるのは妥当である。⁽¹⁹⁾ 孟銑は懷感の名著に序文を載せる程に篤信の浄土宗の信者であったことは、かれの伝記のどれにもみられないので、この方面の研究上有益な発見である。

孟詵は孫思邈と共に「旧唐書」では方伎伝に入れられており、「新唐書」では隱逸伝に入れられているが、進士出身で官途につき、垂拱初（六八五）では累遷して鳳閣舎人となったという。孫思邈の卒年は六八三年であるからこの頃はすでに、孫思邈は死んでいたが、かれはこれより前、少年の頃より方術を好み、かつて鳳閣侍郎の劉禕之家で薬金を見た話が「太平広記」に特に詳しく述べてある。それは孟詵が博聞多奇敏悟の人であったことを証明するため話で、劉禕之が金椀に酪をもっていたのをみて「これは薬金にして石中より出る所の者ではない」というと、禕之が「これは天子より賜わったので、假金（にせ金）ではない」といい、詵は「薬金は仙方の資する所のもの假ではない。……薬金はこれを焼くと、その上に五色の気がある。」といったので、これを試みると、果してそうであったが、禕之がこれを則天にいうと、則天武后はそれを聞いて悦ばなかったとある。

この後、孟詵は台州司馬・春官侍郎や睿宗在藩中の侍読などをへ、長安中（七〇一〜四）同州刺史となり、神竜初（七〇五）に致仕して伊陽山（河南汝州伊陽県）の山第に帰り、薬餌を以って事としていた。かれは晩年になっても志力は壮年のようで、親しい人に「若し能く保身養性しようとするならば、善言を口より離すなく、良薬を手より離すなかれ」というていた。睿宗が任用しようとしたが、固辞したので、景雲二年（七一）に優詔して一百段を賜わ

り、また毎年春秋二時に特に羊酒・糜粥を給った。ついで開元初（七一三か）河南尹の畢構が孟詵に古人の風があるというので、その居る所を「子平里」と改めたが、ついで九三歳で卒したという。そうすれば孫思邈が一〇三歳で卒した時（六八三）には孟詵は六四歳位であったとみられるが、孟詵の著書としては「家礼」一卷・「祭礼」一卷・「喪服要」二卷・「補養方」三卷・「必効方」三卷などがあった。これによれば孟詵は家礼や喪・祭等の礼を重視する儒家であると共に、不老長寿を願う方士系の道士でもあったので、善言と良薬とを手離すなといったかれの言葉も出たものとみられ、そしてここに儒教を肯定し乍らも仕官を拒んだ孫思邈と違って、仕官した孟詵の行動の根拠も理解されるが、他面また孟詵が孫思邈と共に仏教信者であった点については後に触れよう。

盧照鄰のことは前にも述べたが、かれは初唐の詩界では四傑（王勃・盧照鄰・楊炯・駱賓王）の一人として著名である。⁽²⁰⁾ 幽州范陽の人で、早く十歳のころ曹憲王義方について書道や経史を学び、博学にして文をよくした。間もなく鄧王（元裕、高祖第十八子）の王府の典籤（書記官）に任ぜられた。鄧王は当時かれをわが司馬相如（漢の武帝に仕えた賦の名人）であると称したという。ついで新都の尉になったが、病気になって退官し、太白山に入り方士の玄明膏を得て服餌に努めた。当時太白山には孫思邈も居ったので、恐らく盧照鄰はここで孫思邈とも知りあったものとみられる。しかし盧照鄰は病いよいよ篤くなり、陽翟の具茨山に移って莊園数十畝を買い、潁水を延いて莊宅の囲りにめぐらし、また予め墓を造って時にその中に臥したりしていた。積疾文や五悲文などは、当時病に苦しんで著わしたものであるが、四十歳の時、ついに病苦に堪えず潁水に投じて自殺したという。かれの病気は恐らくひどいリュウマチであったと思われるが、文集二〇巻を遺して薄幸の一生を終った。かれが方士や孫思邈と交わったのは、思想や性格に相通ずるものがあったからであろうが、一つにはその病苦の治療上かれらの医薬・服餌の方伎に惹かれた為めであろう。

前項では不仕隠逸の生活を貫き通した道士孫思邈の周囲の人間関係について一瞥した処、一般に野心家や所謂悪人はなく、詩文に巧みで寧ろ隠逸の風ある堅実な智識階級の人々のようであった。これは正しくかれの人柄の反映ともみられるであろうが、中でも最もかれに類似した人は孟詵であったようである。しかし最もかれに私淑し、最もかれを尊敬し、かれの治療をうけ、時にかれの医学哲学とでもいふべきことまで質問していたのは盧照鄰であったとみられる。この盧照鄰が孫思邈を評した言葉が「旧唐書」の孫思邈の伝にある。

〔孫思邈〕邈道合古今、学殫数術。高談正一、則古之蒙莊子。深入不二、則今之維摩詰。其推步甲乙、度量乾坤、則洛下閎安期先生之儔也。〕

すなわち孫思邈の道は古今に合し、その学は数術をつくしている。道家の正一を談論すれば古の莊子のようである。深く大乘不二の仏教に入った点で今の維摩詰ともいふべきであり、曆学・天文に通じているところは安期先生(21)の儔であるといふのである。これはいささか溢美の辞の感はあるが、長く病に苦しみ薄命に終った文士盧照鄰が膚で感じた尊敬する老師孫思邈の姿であったであろうから、充分尊重すべき人物評といわなければならぬ。ただ孫思邈が老莊道家の隠逸清談の士であり、不老長寿の仙術を求める方士系の真人であったことは認め得るとしても、今ここで突然在家仏教信者の理想像ともいふべき維摩居士に当てられていることには、いささか意外に感ぜざるを得ないであろう。

しかし孫思邈は「旧唐書」の本伝に「弱冠善談莊老及百家之説、兼好釈典。」とある通り、道士といわれ乍ら兼ねて仏典をも好んだ。「釈氏通鑑」卷八はこれについて「善莊老陰陽医薬之術、尤重釈典、世称孫真人焉。」といい、兼

ねてではなく、尤も釈典を重んじたと強調している。これは仏僧であった著者、宋の本覚のいい過ぎとも見られようが、実際孫思邈は深く仏教を理解し信仰していたようで、既に叙べたように南山律宗の祖名僧道宣と林下の交を結んでいたのである。私がかれに興味を感じたのは、実はこの事を知ってからであった。孫思邈は唐の法蔵の「華嚴経伝記」巻五によれば、「華嚴経」を最も尊信して七五〇余部も書写したという。そしてかれの著書「千金方」が出来て、かれがそれを唐の高祖（太宗か）に進上した時に禁中に召され、天皇として如何なる功德を修することが最も佳いかと問われたのに対して、「天皇はどうして華嚴経を読まないのか。」と反問したという。そしてさらに天皇は大人だから大典を読むべきであるという、高祖は大典というならば近頃玄奘が訳した「大般若経」六百巻の方が大きいではないかと反論した。これに対してかれは般若空宗は華嚴宗の中に含まれておるから、「般若経」は「華嚴経」の一門であると主張したという。この話は唐の惠英撰・胡幽貞纂「大方広仏華嚴経感應伝」には太宗との対話として載せてあるが、この方が正しいとみられる。

これらの話は法蔵が唐の太宗時代の玄奘以上の高僧として、いわゆる八十華嚴によって華嚴宗を確立し、華やかに活躍した周の則天武后時代を宣伝する「華嚴経」説話ともみられるが、他面、孫真人ともいわれた道士の孫思邈が当時としては最も新らしく、また大乘理論仏教としては最高の内容をもつ「華嚴経」を理解し、その信仰を時の天皇に勧めたということは注目すべきであろう。

なお前出の「華嚴経伝記」によれば、孫思邈の子の行真（別名元一）も貞正・該博・強記・洽聞で、父の風を継ぎ、華嚴を以って業となし、当代知名高信の士であったといわれている。さらにまた思邈の弟子の孟詵も仏教を信じ、とくに善導の弟子懐感のためにその著「釈浄土群疑論」の序を書き、その中に自から早く浄業を修したと述べている。これによれば実に孫氏一家は父子にわたって篤信の仏徒であり、またその仏教信仰が広く門弟にも及んでいたことが

知られるであろう。しかし孫思邈の思想の基本は漢族固有の道教に外ならず、これにインドの大乗仏教と中国の上流智識階級に通有する儒教倫理とが融合していたのであって、かれの「会三教論」はそれを示すものとみられる。こうした思想宗教の傾向は早く隋代に現われており、儒教を基調としたものであるが、「顔氏家訓」や「文中子」などにもそれを指摘し得るものがあり、仏教界でも周知の如く天台智顛が、中国人の仏教として堂々たる天台宗を立てていたのであった。

八

以上は道士孫思邈について若干の所見をのべたものであるが、かれの学問については現存のかれの著作を通してなお検討する必要がある、特に主著「千金方」にみえる医薬に関しては、更にその道の方々に協力を乞わなければならぬであろう。何れにしてもかれは、前にも触れたように、後世永く多くの人に追慕され、それにつれて種々の伝説も残されている。その一部は「歴世真仙体道通鑑」の本伝や「太平広記」卷二一などにものせてあるが、いま宋の范成大の「吳船録」巻上にみえる「峨眉山牛心寺記」⁽²²⁾によると、四川省の峨眉山牛心寺はもと孫真人の隠居していた処で、かれは時々諸山寺に出て来て、僧を招いて誦経し、金銭を施与したといひ、またそこに孫仙人の煉丹竈も遺っていたという。

つぎに清代の王士禎の「池北偶談」巻三六⁽²³⁾にも「孫真人」と題し、以下のような興味ある短文を載せている。すなわち三原（陝西省三原県）の民・苟氏の婦が蠱脹を病み、諸医師も致し方なく手を束ねる中に氣絶したが、二鼓（午後一〇時頃）をすぎて忽ち甦った。家の人が驚き喜んでわけを問うた処、さきに門を出て遠くに行くような氣がしていると、途中で一老人に遇った。老人は汝を治療するために自分が孫真人を招引しているから、早速家に帰れといっ

たので、引返して門を入ると孫真人がすでに先きについていた。年は三〇ばかりで、連環針を以って心臓の竅上に針を打ってくれた。久しくして醒めたが、自分では死んだことをも知らなかった。しかし胸をみると上と下に二つの孔があつて、七日後癒合した。そしてこの後一一年を経て本当に死んだという。これは三原県の医士王文の説であることわつてあるが、この話は孫思邈がその死後約一千年、清初の王士禎の時代においても、なお一般に名医としてよく知れわたり、民間では神格化されていたことを示すものであろう。

註

- (1) 「続仙伝」卷中・隱化は「道藏」一三八冊に載せてある外、「雲笈七籤」卷一一三下にもみられる。
- (2) 「玄品録」卷四は「道藏」五五八冊
- (3) 「歷世真仙体道通鑑」卷二九は「道藏」一四四冊
- (4) 「宣室志」は「唐人說薈」四集に収録されているが、それには孫思邈の記事はない。
- (5) この問題に関して勝村哲也氏は「六朝隋唐の稗史、小説の整理に関する覚書（「恵谷先生浄土教の思想と文化」）と題して見解と労作を発表されている。
- (6) 宋の本覚「釈氏通鑑」卷八など仏教史も言及しており、最近では民国二八年（一九二九）刊「歴史感応統紀」卷三にも孫思邈のことをのべている。
- (7) 開皇辛酉を開皇辛丑の年とみる説は、胡玉縉の「四庫全書總目提要補正」卷三〇・医家類（楊家啓「四庫大辭典」に附載）に孫思邈の「千金要方」を採り上げて考証した所にも見られる。
- (8) このような話は「太平広記」卷二二に明皇（玄宗）が夢に孫思邈と会つて、石薬の雄黄を贈つたとか、感通末年に孫思邈が白水僧院で極美の湯液をつくつて童子に飲ませて姿を消し、童子もつづいて空に飛び去つたとか（「歷世真仙体道通鑑」にも略説してある）いう多くの説話にもみられ、不老長生神仙の術を誇張しようとするものであるが、これが道士の生卒年代をしばしば不明ならしめるものである。
- (9) 拙著「隋唐仏教更の研究」（第九章唐の西明寺道宣と感通）参照
- (10) 「宋高僧伝」卷一四の道宣伝では「凡七日池水日漲数尺」とあるは誤りで、「太平広記」卷二二に「七日縮水数尺」とある

方が当然であらう。

(11) 「太平広記」卷二一では「胡僧利弟子腦、將為藥、欺天子」とある。

(12) この言は「旧唐書」の伝にも載せてあるが、「太平広記」の医類の方がやや詳しいので、つぎにあげてみよう。

「吾聞善言天者、必質於人。善言人者、必本於天。故天有四時五行、日月相推、寒暑迭代。其転運也、和而為雨、怒而為風、散而為露、乱而為霧、凝而為霜雪、張而為虹霓。此天之常数也。人有四肢五臟、一覺一寐、呼吸吐納、精氣往来、流而為榮衛、彰而為氣色、発而為音声。此亦人之常数也。陽用其精、陰用其形、天人之所同也。及其失也、蒸則為熱、否則生寒、結而為瘤贅、隔而為癰疽、奔而為喘乏、竭而為焦枯、診発乎面、變動乎形。推此以及天地亦如之。故五緯盈縮、星辰錯行、日月薄蝕、彗孛流飛、此天地之危診也。寒暑不時、此天地之蒸否也。石立土踊、此天地之瘤贅也。山崩地陷、此天地之癰疽也。奔風暴雨、此天地之喘乏也。雨沢不降、川沢涸竭、此天地之焦枯也。良医導之以藥石、救之以針灸。聖人和之以至徳、輔之以人事。故体有可消之疾、天有可消之災。通乎数也。」

右の文中の（ ）内は「旧唐書」の伝の文字である。

なおこの文章は「容齋五筆」卷二に「孫馬両公所言」と題して引用されており、物と自然にして無私なることが、名医の治病の極意であるといっている。

(13) 東京教育大学附属理療科教員養成施設雑司谷分校蔵「元板翻刻 千金方」(東京盲学校図書之印がある)による。因みに同校には漢方医薬等に関する古本が若干あり、また近刊のこの方面の図書も私の在任中に集めたものがある。

(14) 「旧唐書」卷一八七上・高叡、「新唐書」卷一九一・高叡を参照。高叡は忠臣とされ、高仲舒は経史に通ずる博識の人であったという。

(15) 「隋書」卷五七、盧思道伝および「新唐書」卷一〇六・盧齊卿伝参照。

(16) 「旧唐書」卷八一・孫処約、「新唐書」卷二〇六・孫処約参照。

(17) 「新唐書」卷二〇二・宋之間および「旧唐書」卷一九六上・吐蕃伝を参照。なお「旧唐書」卷一九〇・中・宋之間に「父令文有勇力、而工書善属文」とある。

(18) 「新唐書」卷一九六参照

(19) 金子寛哉氏「『孟銑伝』について」(『印度学仏教学研究』二〇の一)。金子氏よりこの研究をされている時に若干質問を受けていたので、考証の点は承知している。

(20) 「旧唐書」卷一九〇上・盧照鄰、「新唐書」卷二〇一・盧照隣。初唐四傑のことは「旧唐書」卷一九〇上・楊炯伝などに散見するが、「太平広記」卷一九八も「朝野僉載」を引用してこのことに関して盧照鄰の文の優れた点をのべている。なお「唐才子伝」卷一にも盧照隣の伝があり、方士の文明膏のこと等もみえる。

(21) 蒙莊子は蒙県の人莊子を指すが、洛下閎安期先生の安期先生は「史記」卷二八封禅書や「列仙伝」卷上その他の仙伝の類に安期生として挙げられている。瑯琊阜郷人といわれ、東海に売薬して秦の始皇と会って三日三夜語りあった。始皇帝は金璧を賜ったが受けず、数年後にわれを蓬萊山下に求めよといって去った。始皇は徐市らを遣して捜させたが、ついに果せなかつたという。安期生については清の趙翼の「陔余叢考」卷三四にも考証されているが、医薬を主とした方士で、天文・曆法については格別有名ではなく、孫思邈を安期生に比べることも余り適切とはいわれなかつた。

(22) 「大正新脩大藏経」卷五一、史伝部三に所載のものによつた。

(23) 「筆記小説大観」第三輯本によつた。